EXHIBITION

超群島 HYPER ARCHIPELAGO

2012年3月11日[日]—4月16日[月] | EYE OF GYRE | 表参道GYRE 3F

主催:GYRE | 企画・監修:飯田高誉 | キュレーション:藤村龍至 | アソシエイトキュレーション:高橋洋介 | 協力:生駒芳子 | 入場無料 | 11:00-20:00 | 不定休

3.11以後、アーキテクト/アーティストたちは世界をどう見るか? | How does the architects/artists see the world after 3.11?

TAKAYO IIDA

[超群島 HYPER ARCHIPELAGO展開催にあたって]

3.11以後、アーキテクト/アーティストたちは世界をどう見るか?

飯田高誉 | 本展企画監修者/青森県立美術館美術統括監/京都造形芸術大学客員教授

「超群島── HYPER ARCHIPELAGO」展は、「3.11」以前に今まで私共が企画した幾つかの展覧会の潮流に位置している。「エコロジーの危機」をあらゆるレベルにおける生態、つまり環境に止まらず、心や社会の様態を複合的に考えることをテーマにした「エコゾフィーの実践」展(2008年)から起動し、「ARCHITECT JAPAN-ARCHITECT2.0—WEB世代の建築進化論」展(2009年)へと書き換え、「CITY 2.0—WEB世代の都市進化論」展(2010年)によって上書きし、さらに「Sputniko!-Tweet Me Love」展(2011年)ではSNSを活用し"リアル"と"ヴァーチャル"な境界領域を壊乱し、そして「第2回 堂島リバービエンナーレ2011:エコソフィア」展をこれら展覧会の潮流に合流させることとなった。こうした潮流に浮かぶのが本展覧会「超群島」展である。ここでは、SNSに組み込まれたヴァーチャルな空間領域とリアルなそれとの間で揺動しながら進化し続けている「アートと建築」との関係性を今一度検証する。国家的枠組みから離脱して、モナドが[デジタル—アトポス]な現代的文脈に蝟集(群島化)し、そしてそれらが離散して再び異なった群島として組み替り、果てしなく反復する様態を「超群島」と呼んでみたい。歴史的陰翳を意識しながらも「タブラ・ラーサ(tabula rasa)」をメタファーとして織り込んだ「堂島リバービエンナーレ2011」の準備中に日本における観測史上最大規模の東日本大震災に見舞われ、現実的に「白紙」へと還元されてしまった。

2011年3月11日以後、エネルギー問題やインフラストラクチャーの脆弱性、中央と地方の産業構造の格差や金融資本主義の非対称性、さらに危機管理体制と安全保障問題、そして政治の無力性などが次々に明るみになった。つまり戦後の総括を先送りにしたツケが被災における被害を深刻化している。「3.11」は、モダニズムに根差した戦後のパラダイムに切断線を引き、いくつもの自己矛盾を孕んだ問いを私たちに突きつけている。高度経済成長という社会背景のもとに交通インフラの整備などを通して実現されてきた、これまでの日本列島の将来像を情報インフラの整備を介していかに書き換えていくのか、またコントロールを失い機能不全と化したこの国のシステムの問題解決を図るための新たな意思決定のイメージとは何なのかといった問いに対して、本展覧会では、新たなコミュニケーション間のプロトコルを起動させ、パブリックな意思決定のイメージに介入する「アーキテクト/アーティスト」たちのメッセージを発信するものである。そして、日本の社会再生の一端を担うべく「アーキテクト/アーティスト」たちの作品を通して情報インフラが生み出す空間イメージやメタファーとしての「群島」を再考し、さらに「超群島」ともいうべき世界観を提示することが本展覧会の使命であると考えている。最後に本展覧会の企画監修者として、本展出品者でもある磯崎新氏の「群島」というコンセプトから多くのインスピレーションを戴いたこと、また、出品参加されたアーティストや建築家、そして彼らを支え協力していただいた多くの方々に深く感謝の意を表させていただきます。

2012年3月11日

RYUJI FUJIMURA

島々のアーキテクトたち

藤村龍至 | 本展キュレーター/建築家/東洋大学専任講師

本展覧会では「群島=アーキペラゴ」をモチーフにすることによって、インターネット、特にクラウドコンピューティングのネットワークと、島々のネットワーク=日本列島を繋げようとしている。インターネットと日本列島は、ともに高度なインフラストラクチャー(基盤)に支えられている。1960年代以降、日本政府は「全国総合開発計画」を掲げ、新幹線や高速道路、港湾設備、空港、大規模発電施設など、世界中稀に見る速度と精度でインフラのネットワークを構築し、農業国から工業国への転換を果たした。コンビニにせよ、教育や医療にせよ、今日の私たちの生活のほとんどは、このインフラのネットワークによって支えられている。

50年前の当時、農村部と都市部の地域間格差が問題とされた。建築家は都市計画家、政治家らと協力し、問題を分析し、解決案を提示しようとした。橋を掛け、トンネルを掘り、海を埋め立てて工業国へ転換したことは環境やコミュニティの破壊を招いたが、前提は農業国の貧しさを救うための解決であった。

50年ほど経った今も、インフラの整備は続いている。一度作ってしまった制度と組織は複雑化し、誰にも止められず、粛々とインフラを整備し続け、新たな問題が引き起こされている。その間に地域間格差は世代間格差へと入れ替わった。高齢化、人口減少、財政難など、日本社会が抱える構造的な問題が3.11を経て、いよいよ顕わになった。

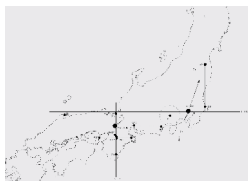
他方で3.11が明らかにしたひとつの希望は、新たな情報インフラの持つ潜在的な可能性だった。硬直しがちな行政組織の動きを、新しいインフラを駆使する市民がサポートするようになったのだ。もし私達が日本の現状を前に積極的に問題を分析し、解決案を提示していくアーキテクトでありたいと考えるなら、打開策の一つは、これらのインフラによって構築された新しい社会関係=ソーシャル・ネットワークによって、硬直化した既存の制度や組織を書き換えていく可能性なのではないかと思う。

アーキテクトは、解決案を提示するだけでなく、それが現実に機能するように言説もプロデュースしなければならない。そこで本展覧会では、世界を見渡すだけでなく、よりよい世界に向けて展望を示す作品を中心に選定した。そして、集まったアーティストたちをあえて「アーキテクト」と呼び、作品をあえて「プロジェクト」と呼ぶことで、今日の政治的状況にひとつのイメージを与えようとした。

[キュレータによる解説]

磯崎新 | Arata Isozaki

建築家。1931年生まれ。磯崎新アトリエ代表



神話構造線

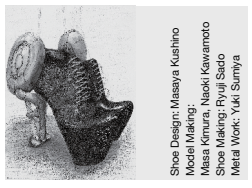
神話が先か、構造が先か

戦後最大の建築家にして磯崎の師匠である丹下健三(1913-2005)は、広島の戦災復興計画の目玉であった平和公園および原爆資料館(1955)のコンペに取り組んだ際、「産業奨励館(現・原爆ドーム)」から引いた南北軸が平和公園の予定地の中心を通ることを見出し、計画の中心に据えた。記念式典の行われる予定であった同公園を単なる庭園にせず、象徴性を持たせるために軸線を設置しようとした建築家はたくさんいたが、小さな展示施設に過ぎなかった「産業奨励館」をターゲットに設定することを提案したのは丹下だけだったという。丹下の引いた1本の線によってこの小さな廃墟は平和公園の中心に据えられ「平和都市・広島」の象徴となり、世界に知られる建築となった。象徴があるから線が引かれるのではなく、線が引かれたから象徴化したのである。

ここで磯崎は、出雲、若狭、熊野、平城京、平安京、伊勢、富士、鹿島といった象徴的な場所が軸線によって関係付けられることを示し、「福島」をそこに結びつけることで、そうした神話の一部に取り込もうとする。原爆によって被災した場所が建築家の引いた線によって象徴化され、生まれ変わったように、福島を生まれ変わらせようとする。

スプツニ子! | SPUTNIKO!

1985年東京都生まれ。ロンドン大学インペリアルカレッジ数学部、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート大学院修了。原田セザール実との共同プロジェクト「Open_Sailing」アルス・エレクトロニカで[the next idea]受賞。展覧会に、「東京アートミーティング トランスフォーメーション」(東京都現代美術館、2011)、「Talk to Me」(ニューヨーク近代美術館、2011)など



菜の花ヒール—Work in Progress

インフラをベースに、コミュニケーションをメディア化する

スプツニ子!は、SNSを用いて構築された人間関係を用いて作品制作を行い、発表も行うというように、自身の活動の大半をインフラをベースとして展開する。ここでは、靴デザイナー、串野雅也氏とのコラボレーションによって、歩いたあとから「菜の花」を咲かせる仕組みを持つハイヒールをデザインし、そのプロセス全体をプレゼンテーションしている。このプロジェクトは、チェルノブイリなどで除染効果が実証されている「菜の花」を用いて福島原発事故以後の放射能汚染の問題を考える活動「菜の花プロジェクト」に触れたことから制作が開始された。福島県南相馬市の仮設住宅の交流サロンで被災者らと意見交換やアイディアの相談を行い、滋賀県で開催された「菜の花学会」に参加するなどリアルな空間で重ねられたコミュニケーションがハイヒールの制作およびそれをまとった作者本人が出演する映像作品を通じて次第にメディア化され、より大きなコミュニケーションを巻き起こしていく。

チームラボ | TEAM LAB

プログラマ・エンジニア、数学者、建築家、Webデザイナー、グラフィックデザイナー、CGアニメーター、絵師、編集者など、情報化社会のさまざまなものづくりのスペシャリストから構成されているウルトラテクノロジスト集団

グラフィティ@グーグル
東京群鴉図〈Horizontal〉

グーグルに絵を描く、という行為が暗示する建築家像

チームラボは情報技術をベースにソリューションを提示する組織型のサービスを展開する一方、絵画の日本的意匠を独自の解釈とともに情報技術を用いて再構成するアーティスト型の活動を並行させる。そのあり方は、匿名的な設計組織と作家型建築家がコラボレーションして技術性と固有性を両立させようとする、今日の巨大都市開発プロジェクトの設計者のあり方によく似ている。

ここで彼らはグーグルの画像検索システムに着目し、その一部を一時的に占拠してひとつの「絵」を描こうとする。グーグルで画像検索すると、世界中のネット上にある画像が格子状に表示されるが、検索結果の順位を決定するアルゴリズムは公開されていないので、ここではそれを逆手にとって「利用」し、画像を意図的に配列し、グーグルをキャンバスにして一枚の絵を描こうとする。この行為を彼らは、土木構築物などの物理的なインフラをインフォーマルに占有し、匿名的に絵を描いてネットワークさせていくグラフィティになぞらえるが、この作品制作の姿勢そのものが、高度に複雑化し、硬直化した既存の制度に乗ってプロジェクトを量産する組織型の建築家と、制度の隙間で絵を描き、ネットワークさせて力を得ようとする現代の建築家やコミュニティ・デザイナーたちの対比をよく示している。

大庭大介 | Daisuke Ohba

撮影=菊池良助

1981年静岡県生まれ。京都造形芸術大学卒業後、東京藝術大学大学院修了。主な個展に「The Light Field 一光の場一」(2009年、SCAI THE BATHHOUSE, magical ARTROOM)など。主なグループ展に「時の遊園地」(2010年、名古屋ボストン美術館)など

FOREST #2
2009 | 180 x 220 cm | acrylic on cotton
撮影=木奥恵三

無数の点と線の集合によって描かれた、無人の森のイメージ

鬱蒼と繁る森を描いた巨大な絵画である。偏光パール系の絵の具で描かれているため、光の角度によって、その色彩が構造色のように変化する。さらに、遠くから全体を眺めると、樹海のイメージが具象的に現れるのに対して、近づいて細部を観ると、無数の色点と、余白の線で構成されたオールオーバーな抽象画がみえてくる。ここでは、近代的なリアリズムのように明暗法などで自然の変化を否定し支配するよりも、他律的な環境の移ろいそのものと共生するための方法が試みられており、私たちが自然をどのように知覚しているのかを教えてくれる。

この掴みどころのない無人の森のイメージはまた、今日の情報社会のインフラのようでもあり、従事する人をなくした今日の日本の林業の姿のようでもあるが、無数の想像力を束ねて列島の将来像を示す、人々の無意識から潜在的な文学を生成する方法を示唆するものでもある。

石井七歩 | Naho Ishii

1991年東京都生まれ。主なグループ展にHidariZingaro史上最多入場者数を達成した「エノテロリスム」(2011年、HidariZingaro、東京)、「堂島リバービエンナーレ2011 "Ecosophia"」(2011年、堂島リバーフォーラム、大阪)など

理想惑星[分岐してゆく]

少女のような大地、という社会イメージ

石井七歩は、「宮」「島」「国家」など住宅や都市や国家をモチーフに理想像を描く。しかもそれらの断片を対象にするというよりは全体を描こうとし、背景の社会システムをモチーフとしている。住宅像、都市像、国家像をスケールを横断しつつ連続して描こうとする姿勢は、住宅から国土計画まで幅広く提案する変革期の建築家のようである。ただし、それらの情景を個々にリアルに描くというよりは、少女性にあふれた世界観として提示するというアプローチを採る。

ここでは、3.11以後に制作したドローイングを中心に展示が構成されている。「理想宮」の新作2点は被災地と東京の精神的な温度差が描かれる。「理想島」では島国の大地が少女に喩えられ、街を支える大地を「母なる大地」のような安定したものではなく、少女のように不安定で未成熟なものと捉えられる。さらに「理想惑星」の新作は平行世界をテーマに、現在のありえたかもしれない別の可能態として街の4つの様態(原始の街/自然と共存する街/密集する街/破壊された街)が描かれる。これらの表現は、私たちの社会の基盤に潜む曖昧さや危うさを表現すると同時に、複雑なシステムを少女性によって覆う、日本社会のありようをも示唆するものである。

SAM[田尾松太+井口美香] | SAM(Shota Tao + Mika Iguchi)

2012年に結成したアートユニット。インスタレーション、ミクストメディア、パフォーマンスを複合させた作品を展開する。2013年より、アートチーム兼スタジオ「eerljik mushroom」を設立する予定。| 田尾松太:1986年山口県生まれ。2012年アートユニット「SAM」を結成 | 井口美香:1989年兵庫県生まれ。多摩美術大学在学。2012年アートユニット「SAM」を結成

Oh! NO

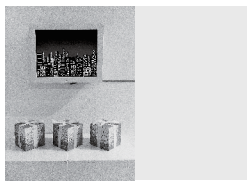
技術が生成する認識

SAMは複数のメディアを用いて、震災という非日常的な出来事に関わる人々の認識が生成されるプロセスを提示しようとする。《与えられたとせよ 1.横たわる水 2.節電用ガス(処女作)》は、デュシャンの【遺作】を参照しつつ、ボックス内部のふだんは消されているフクシマの影が地震がくると顔を出すよう仕掛けられており、自然に敗北し続ける人間の技術を二重に象徴しようとする。《建築家たちのための余白》は、被災前の都市のイメージを水が溶かす過程を映像で記録し、それを103時間40分かけ逆再生させることで被災地を想像的に復興させ、都市の姿に戻そうとする。《my choices:view no.2011~2012 (03.11)》は、3.11以後の1年のさまざま断片を絵画化し、レイヤー状に重ねたインタレーションである。ウェブやテレビに映された津波後の廃墟の風景と、作者の周りの友人たちがアップロードした日常のスナップ写真を並列・積層し、震災後の現実について問いかける。

これらの作品群によって、震災の記憶は私たちの日常によって遮断されてしまうが、youtubeにアップされた無数の動画が常に震災についての記憶を上書きするように、技術が生成する認識のあり方が示唆されている。

キュルル feat. チハルチロル | cururu featuring chiharu-chiroru

2006年に結成されたキュレーター、アーティスト、デザイナー等から構成されるアートユニット。「個」としての人格を持たず、「個」としての主張も持たない、ゆえに個人名の存在しない、複数の人間が関わり、アート、文化、社会といった現代の諸相をどこまでも記号化して提示することで、賛美、肯定、批判など様々な評価と解釈が生じる作品を手がけている(ただし、いわゆる「現代美術」だけは批判可能としている)。



ひかりのありか

受け取ってしまった贈り物の意味

映像作家のチハルチロルを加え、2011年3月11日以降の日本をとりまく状況を象徴的に表現したインスタレーションである。都市の煌々とした夜景を映し出すモニターの前に、福島第一原子力発電所を模した立方体が4つ並んでいる。リボンが結ばれ、まるでプレゼントのようにみえるそれは、まさに都市の電力が原子力発電所からの贈り物であることを示すと同時に、原子力発電所を通じてなされる地元への贈り物、すなわち地元自治体への交付金を始めとする、中央からの様々な経済的な還元が行われていたことを示す。その贈り物のリボンは、3.11まで解かれていなかった。どんな贈り物にも込められた意図があるが、贈る側も贈られた側も、その意味をうっすらと感じながらリボンを解かずにずっと放置していたのである。3.11以後、パンドラの箱のように開け放たれた原子力発電所の廃墟の跡から、その贈り物の意味、すなわち近代化を果たした日本列島における中央と地方の政治的な関係、あるいは大都市圏に暮らす住民および地元住民と原子力発電所の依存関係とリスク、などが次々と示されることとなった。これからもしばらくの間、私たちの社会は受け取ってしまった贈り物の意味を考え続けることになるだろう。

dot architects+水野大二郎 | dot architects + Daijiro Mizuno

家成俊勝:1974年兵庫県生まれ。関西大学法学部、大阪工業技術専門学校卒業後、dot architects共同主宰 | 赤代武志:1974年兵庫県生まれ。神戸芸術工科大学卒業、宮本佳明建築設計事務所等を経て、dot architects共同主宰

水野大二郎:1979年東京生まれ。2008年英国王立ロイヤルカレッジオブアート・ファッションデザイン博士課程後期修了。芸術博士(ファッションデザイン)。現在、京都造形芸術大学ウルトラファクトリークリティカルデザインラボ・ディレクター、デザインプロジェクト・DESIGNEAST実行委員、ファッション批評誌・Fashionista編集委員、Inclusive Design Now実行委員、FabLab Japanメンバーなど、多岐に渡り社会とデザインを架橋する実践的研究に従事

インクルーシブアーキテクチャー

誰でも作り、使うことのできる環境をめざす

dot architectsと水野大二郎はこれまで、超日常・TRANSUSEなどをキーワードに、設計する/される関係を対等にする建築のあり方を思考してきた。人が道具をつくり、それを使用して自らの環境を絶えず更新することを可能にし、利用者が主体的に環境に関わることができるようなインクルーシブな建築のあり方のモデルとして、ここでは、ダンボールのピースを組み合わせたシェルターのような仮設物が考案されている。これは福祉施設の協力の下、様々な障害を持つ人とのワークショップを複数回実施し、出来る限りシンプルな作業工程と、ありふれた材料から生み出された建材によって、身の回りの環境を瞬間的に自分のものにする装置として提案されているものである。ダンボールという現代の流通システムの象徴ともいえる日常的な材料と、ハンディキャップを持つ特別な利用者の組み合わせから、誰でも施工できる建築の提案や、誰でも使うことのできる都市の実現に向けた問題提起がなされている。

403architecture[dajiba] | 403 architecture [dajiba]

撮影=kentahasegawa

2011年、静岡県浜松市を拠点にしてプロジェクトを始める。建築設計、監理、解体、増改築、施工、運営を横断した活動を展開している。代表作に「海老塚の段差」「渥美の床」など

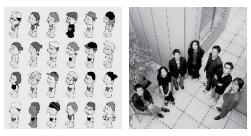
彌田徹(左):1985年大分県生まれ。2008年403architecture設立。2011年筑波大学大学院芸術専攻貝島研究室修了。2011年403architecture[dajiba]設立 | 辻琢磨(中):1986年静岡県生まれ。2008年403architecture設立。2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了。2010年からUrban Nouveau*、2011年からメディアプロジェクト・アンテナ企画運営。2011年403architecture[dajiba]設立 | 橋本健史(右):1984年兵庫県生まれ。2008年403architecture設立。2010年横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了。2011年403architecture[dajiba]設立

渥美の床 | 撮影=kentahasegawa

ふたつの曼荼羅が示す地方都市の世界

403achitecture[dajiba]は、経済が衰退し、移民が大量に流入し、中心市街地が空洞化するなど、地方都市が抱える問題の先進地と呼ばれる浜松で活動を展開する。ここでは、浜松のマテリアルを使った一対の曼陀羅が示される。ひとつは建築物の解体によって得られた建材などの物質的なマテリアルを用いて実践と現象世界を表す「胎蔵界曼荼羅」を模したもの。もうひとつは空中写真や建築物の立面写真から得られた画像データなどの抽象的なマテリアルを用いて論理と精神世界を表す「金剛 界曼陀羅」を模したものである。浜松という都市がふたつの曼荼羅という「世界そのものの展開図」と同じ形式で示されることで、浜松の現在の有り様を提示することが意図される。また、世界そのものが生まれ、成長し、消滅していくプロセスが示されている曼荼羅というモチーフそのものが、都市のマテリアルを流動させ、新築、改築、解体を区別せずに、建築や都市をめぐる社会の構造をスライドさせていくという建築家の姿勢をも示している。

mashcomix+TEAM ROUNDABOUT | mashcomix + TEAM ROUNDABOUT



mashcomix | 1999年結成。漫画家、イラストレーター、デザイナーなどで構成される創作漫画集団。現在までに8冊の同名漫画雑誌を発行。また、一軒の家屋をすべて使った「HOUSE」展、池尻中学校での「RANDSEL」展などの展示活動から、雑誌『TOKION』『建築雑誌』での連載「N.Y. TOKYO BAR」の内装アートワークなど、多岐にわたり活動中

TEAM ROUNDABOUT | 建築家、編集者、グラフィックデザイナーからなるメディア・プロジェクト・チーム。2002年、藤村龍至と山崎泰寛により活動開始、2007年より現編成。「議論の場を設計する」をスローガンにフリーペーパー『ROUNDABOUT JOURNAL』、イベント『LIVE ROUNDABOUT JOURNAL』、ウェブマガジン『ART and ARCHITECTURE REVIEW』の企画編集・制作を行うほか、書籍の出版、全国各地でのシンポジウムの開催、展覧会のキュレーションなどを精力的に展開し、独自の現代日本建築・都市論を提示している

www.round-about.org
aar.art-it.asia

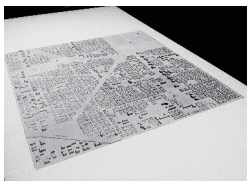
戦後建築史マンガ

「7人の侍」のような建築家像

1945年以後の各時代における建築家のイメージを描く「戦後日本建築史マンガ」である。戦後史を大阪万博の行われた1970年、阪神・淡路大震災、オウム事件、インターネット元年を迎えた1995年、東日本大震災の起こった2011年によって4つに区分する。建築と政治が緊張関係を保っていた頃(1945-70年)の、未来を予測する科学者としての建築家像は、高度経済成長による国土全体の近代化のプロセスで都市の急速な拡大と共に外部空間で団体戦を行う組織型の設計者と内部空間で1対1の関係でセッションするアトリエ型の作家へと引き裂かれ(1970-95年)、さらに「終りなき日常」(宮台真司)のなかでまったりと生きる女子高生の世界は、背後にアメリカ発の情報環境の拡大、グローバリゼーションは見えないメタレベルのシステムを扱う建築家像を浮かび上がらせた(1995-2011年)。ここでは、2011年の震災を経て、コミュニティに介入し、人々のコミュニケーションの下部構造にアプローチし、ボトムアップによってヴィジョンを描いていく「7人の侍」のような英雄像を今日の建築家像として予言的に位置づけている。

藤村龍至 | Ryuji Fujimura

1976年東京都生まれ。2008年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学。2005年藤村龍至建築設計事務所主宰。2010年より東洋大学専任講師。2007年よりフリーペーパー『ROUNDABOUT JOURNAL』企画・制作・発行。2010年よりウェブマガジン『ART and ARCHITECTURE REVIEW』企画・制作。主な建築作品に「BUILDING K」(2008)「東京郊外の家」(2009)「倉庫の家」(2011)「小屋の家」(2011)。主な編著書に『1995年以後』(2009)『ARCHITECT 2.0』(2011)『3.11後の建築と社会デザイン』(2011)。主なキュレーションに「超都市からの建築家たち」(2010)「CITY2.0」(2010)



雲の都市 2012

問題を関係付けて解く

中心を持たず、ユーティリティとモビリティの二層構造によりクラウド型の都市構造を持つことを設計の前提とした「雲の都市」のモデルである。当初は長期的な避難を余儀なくされた福島第一原子力発電所周辺の住民8万人のための都市を、埼玉県熊谷市郊外に建設する「リトルフクシマ」という計画案として提案された。8市町村の住民が当該地内に行政機能ごと移転し、3km四方の敷地に100人/haの人口密度(郊外住宅地の平均)で居住することを想定している。故郷の方角である丑寅(東北)の方角に向けて軸線が取られ、その先端に設置された鎮魂のための広場「丑寅の森」は、毎年3月11日に8万人が一度に集まり、故郷に向けて黙祷を捧げることができる大きさを備えている。

さらにここでは、その軸線を延長し、沖縄へ同様の都市を建設する構想としている。移転が検討されている米軍普天間基地の跡地に「リトルフクシマ」を建設し、基地移転後の沖縄地方と、原発閉鎖後の福島地方の振興策を同時に行って復興コストを圧縮し、住民に対してより多くの還元をもたらすことを意図している。

この模型は、『思想地図β』vol.2に掲載された論考「復興計画β:雲の都市」のプランをもとに制作されたものである。また、同論考は、東洋大学藤村研究室でのリサーチ(担当:東洋大学藤村研究室/荒井允斗/大山宗之/森田幸雄/在原聡一/金澤正人/塩原和記/続木萌)をもとに構成された。

INFO.

GYRE | 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-10-1,3F tel. 03-3498-6990 | info@gyre-omotesando.com | www.gyre-omotesando.com | お問い合わせ先:超群島展事務局 藤村龍至建築設計事務所内[担当:沼野井諭] | Tel. 03-3476-6508 | office@ryujifujimura.jp